

国立公文書館における修復について

現在の体制及び施設

- 修復担当の構成
 - 修復係長・係員 各1人
 - 非常勤(修復専門員)6人 計8人

- 施設・設備
 - ・修復室は事務スペースと共用
 - ・大型の図面等を扱う十分なスペースの確保が難しい
 - ・大型設備はリーフキャストマシン1台



破損資料の修復

<平成25年度の修復実績>

| 修復のレベル | 実績 |
|---------------------------------------|--------|
| 重修復 (破損の大きいもの、 固着が強いもの等) | 283冊 |
| 軽修復 (糸の綴じ直し等) | 6,222冊 |

※平成25年度調査によれば強度の破損により修復が必要な文書は約7,000冊

現状の体制・施設では16年を要する見込み。

虫喰い(虫損)がひどいものなどは、リーフキャストを実施(5,544枚)



リーフキャスト
(すきばめ機)による修復

修復における課題

- ・紙が固着し解綴が困難な資料の扱い
- ・文字の褪色や紙の変色、酸性化など劣化資料の修復
 - ・・・脱酸設備や「低温書庫」の導入等により劣化の進行を遅らせるなどの措置が想定される。
- ・利用請求への速やかな対応
 - ・・・製本不良(11.5万冊)等に対してはリハウジングなどの適切な措置を選択



紙が固着してめくれなくなった資料

※「リハウジング」: 保存箱やフォルダ等の適切な容器に収納し直し、また、必要に応じて汚損が激しい場合は、ドライクリーニングも組み合わせて取扱いやすい状態に変えること。

見学コース(見せる修復)の整備

来館者サービスの一環として、国立公文書館(本館)4階にある修復室を、2階の専門調査員室及び目録作成室の位置に移設し、来館者の見学コースのひとつとして組み込む予定。

海外の修復研修生の受入れ

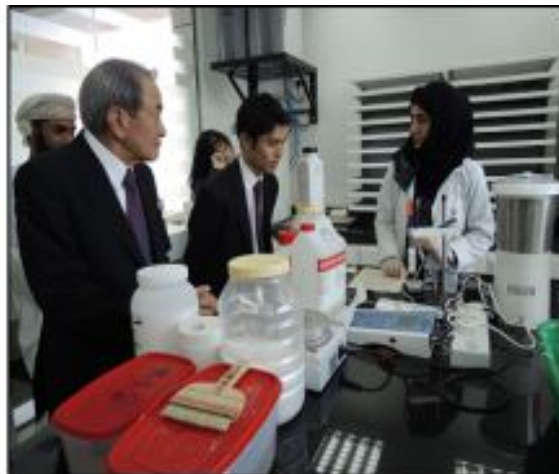
近年の受入実績

平成25年度受入実績 2人(オマーン)

⇒和紙については、修復素材として、各国で注目を集めているが、我が国では、従来、和紙を用いた修復が行われ、特に国立公文書館が数年前から極薄和紙(0.02mm)の活用を図っていることから、技術習得のためのニーズがある。

研修後の活躍事例

- ・津波、地震で被災した文書の修復(インドネシア)
- ・国家的遺産である手書きのインク焼け資料等の修復(オマーン)



オマーン国立公文書庁の招きにより国立公文書館長らがオマーンを訪問し、同庁長官とともに、研修の成果を視察した際の様子(平成26年2月)

【参考】これまでの実績

- ・ガーナ国立公文書館(1人)
H15.7.4-16.1.
- ・イタリア・クレモナ修復学校(1人)
H16.8.5-16.9.10
- ・アフガニスタン国立公文書館(2人)
H18.2.6-18.3.10
- ・インドネシア・アチェ州立公文書館(1人)、同博物館(1人)
H18.7.18-18.8.18
- ・アフガニスタン国立公文書館(3人)
H18.11.6-18.11.28
- ・オマーン国立公文書庁(2人)
H22.8.2-22.8.13
- ・オマーン国立公文書庁(2人)
H23.11.28-23.12.22
- ・インドネシア・西スマトラ州立公文書館・図書館(1人)、同国アチェ国立イスラム大学(2人)、同国パダン国立アンダラス大学(1人)
H24.5.14-24.6.15
- ・オマーン国立公文書庁(2人)
H24.10.8-10.19
- ・オマーン国立公文書庁(2人)
H25.11.19-11.29

【参考】 フランス国立公文書館 Archives nationales

- 2013年に開館したピエールフィット館は、技術者の希望に沿うかたちで充実した修復作業場を設置。専門的な教育を受けた技術者が日々歴史的文書の修復作業に当たっている。修復作業に用いられる材料として、楮を素材とした和紙が使用されている。
- 伝統的な修復作業のみならず、修復した資料を他の歴史的文書と照合し、不明確であった歴史的事実を明らかにする試みも行われている。国立図書館や民間の研究所との連携による研究も行っている。



ピエールフィット館の修復施設
水分を使用する部屋としない部屋を分けて設置

＜進行中の特別プロジェクト＞

ヴェルサイユ宮殿建築に係る設計図面の修復、他の歴史的文書及びデジタル技術を組み合わせた研究プロジェクト

関連する公文書・図面をもとに、あらゆる専門職種が官民チームを組んで共同研究している。